

ぬ

一日おいた二十八日青山教授から関場宛に、

「電見た　ともかく直接協議したきにつき　至急上京

ありたし　いつ発たるるか返　青山」

と直接話し合うことを推めたが、一日おいた三十日関場

から青山教授宛に、

「ご配慮千万かたじけなし　この度親族協議　お断り

することに決定す　委細文」

と辞退する旨の電報を打った。

これらの電文は東大青山胤通教授から愛知医学専門学  
校長兼病院長に関場不二彦を推し、その就任を勧める内  
容のもので、この件については従来から憶測の域を脱し  
なかつたが、これらの電報により事実であったことが明  
白となった。ただ残念なことは断つた理由が不明であり、  
今後も史料の発掘に努めていきたい。

(1)札幌市吉田病院 (2)札幌市  
(3)北海道大学医学部耳鼻咽喉科 (4)弘前大学医学部麻酔科

### 30 維新を生きた村医者 of 生涯

—津下精斉の場合—

津 下 健 哉

精斉(来吉)は津下古庵の長男として文政九年岡山市沼  
で生れる。鼎甫、龍、猪三郎、ていの五人兄妹。幼にし  
て穎敏、天保五年、沼本寿庵の弟子となり嘉永二年迄医  
術修業し郷里に帰る。後再び金川の難波抱節に医学を学  
ぶも程なく抱節の紹介で適塾に入門。安政五年七月、三  
三歳の時で弟鼎甫に遅れること六年。

適塾では石井宗謙の長男久吉と同期入門。久吉の入門  
は同年四月・十九歳。安政六年九月の塾生の成績表があ  
り、その六等に精斉の名が、三等に石井久吉の名が見え  
る。安政六年九月は精斉入門して一年二か月で三四歳の  
彼としては良成績。しかし久吉はずばぬけた成績で、当  
時洪庵が宗謙に送った手紙に「久吉様日又一日御進歩一

人モ右ニ出ルモノ無之扱モ々々能キ御子ヲ御持被遊候事ト羨敷」があるが、この手紙の日付けが先の成績発表と同じ九月で、洪庵はこの成績を見て手紙を書いたのである。久吉はのち石井信義として東校で精斉弟鼎甫と共に小博士、中教授として互いに親しい関係を続ける。

この他、文久二年には洪庵と共に中国・四国の旅をする。これについては『壬戌旅行日記』がある。四月十一日出発、精斉の実家に一泊、郷里足守に帰り、母の米寿を祝う。後中国、四国各地をまわり、六月二日大阪に帰る。この間洪庵は各地で多くの門人に逢うが、中に私の知人、友人の御先祖が数人含まれていて興味深い。洪庵五三、精斉三七歳。旅行後間もなく洪庵から精斉宛の手紙がある。「一関東行之事、去ル廿九日表向ニ御達ニ相成。冥加至極之事ニ御座候。乍併多病老衰今更何之御益ニ立ツト申スニモ之無、先ツ此度ハ討死之期来リ候事ト明ラ居申候」。そして洪庵は十カ月後に死亡する。

郷里に帰った精斉は当然父の医療を助けたであろう。墓表によれば「旧年祇役奥州」とあるが、ハッキリした裏付けはない。但し弟が江戸にいたので、あり得ないこ

とでない。

明治二年一月には参与横井小楠が暗殺される。驚いたことに刺客の一人に同村の津下四郎左衛門(二四歳)が関わっていた事である。筆者と同姓であるが、直接血縁はない。詳細は森鷗外の小説『津下四郎左衛門』に詳しい。精斉は後年彼の長男正高の東京遊学には精神的、経済的援助をする。明治二年に父古庵死亡、当然江戸の弟鼎甫も参列したはず。

岡山医学専門学校は明治三年四月に創設された岡山藩医学館を最初とする。精斉はその創設者の一人に選ばれ、教授方試補を拝命、そして前川準ら五名は二等教授に、島村貫吾らは三等教授試補に任命される。この頃が精斉の最良の年月であつたろう。前川準は精斉の妹「龍」の夫であり、貫吾は同じく妹「てい」の夫である。その後病院の経営が困難となるとか人材不足、外人医師招聘などに苦労があつたようである。精斉が何時まで県病院と関わりを持ったか不明。この間住まいを岡山市東中山下に移す。

この頃から彼の不幸が始まる。先ず明治五年の前川に

嫁した妹「龍」の死。しかし幸いにも「龍」の孫娘「こう」は精斉の弟鼎甫の養女となり、のち中村俊一を養子。俊一は後年京都府立医大に生涯を捧げる。

明治七年には同じく妹「てい」の夫で青年医師島村貫吾が死亡する。石井信義の日記の七月二十八日の項に鼎甫が妹婿貫吾の見舞いに岡山に帰るとの記録あり。「てい」は縁あって他家に嫁ぎ、長男鉄太郎は精斉が引き取って養育、長じて藤原家を継ぎ藤原鉄太郎となり、長らく岡山県医師会長を勤め、足守の洪庵の石碑裏面の撰文は彼による。

最大のショックは明治十一年における独り息子竹五郎の死である。二一歳の青年で医学校在学中、落胆の程が知られる。明治十四年には弟鼎甫も死亡。

次々に身内を亡くした精斉は当然養子を考える。先ず候補としたのが守屋膺庵の次男甫一郎で、彼の岡山県医学校の第一期卒業証書には津下甫一郎の名がみえる。その後不縁。結局児島寿を養子。明治二九年六月の中外医事新報は医学士津下寿氏の愛媛県松山病院への赴任を報じ、その後彼はその地で開業する。

精斉の晩年は淋しいものとなった。書画骨董を愛し、明治二九年には恩師抱節の顕彰碑を金川に建立。明治三二年には郷里の氏神に石灯籠を寄贈。同年四月四日七三歳で死去。

(広島県立身体障害者リハビリテーションセンター)